

引っ越し祝いに送られてきたダンボールには月が入っていた。

その月は春の月でダンボールを開けた時に部屋一面に漂った花の匂いから察するに、桜と共に送られてきたのだろう。案の定、月の下にはすでに役目を終えた梱包用の桜の花弁が飛び出ることもなく綺麗に整理していた。私の人生は引っ越しが多い。初めての引っ越しは元の母親今は赤の他人だけれど、の胎盤から今の母親の胎盤にやってきた時のことだ。元の母親は酷い癩癩持ちで、近所とのトラブルが絶えない女だということを私は胎児の頃から知っていた。だから、私は彼女達の元に生まれることを拒否したのだ。

出産が胎児の意思のもと拒絶されると胎児は特殊な機械で遺伝子情報を全て抹消されて元の受精卵になる。そしてまた別の母親のお腹に宿り、選択の時を待つのだ。

そうして私は今の母親の元に生まれてきた。私を生むまでに母親は三度の出産拒否をされており、体力的にも私が最後のチャンスだった。生まれた時、母の親族は狂喜乱舞し病室内で咽び泣いていた。その泣き声と私の産声が混じり合う中で母親は私に「ありがとう」と言ったのだ。

今の母親の元に生まれたことは全く後悔はしていないけど、母親との人生は本当に苦難ばかりだった。まず、母親は前の夫の借金を肩代わりしていた。だから、私と母は月に一回ぐらいの頻度で引っ越しという名目の夜逃げをしていた。その他にも引っ越し理由はあった。借金取りは狡猾で私の学校の校門の前に立って、母の借金について生徒達に言いふらすのだ。私はその度に周囲と距離を置かれて、学校にいづらくなる。そんな私の学校生活を察してか、その学校での生活が限界に達する寸前で母は「引っ越しそうか」といつも切り出して私をそこではないどこか別の場所へと連れ出すのだ。

ダンボール箱から月を取り出してみると、月には三日月を模した影がかかっている、表面のほとんどの部分が暗闇で見えないまま私の手に収まっている。

「引っ越しの祝いでお月様を送ってくるとか、今時珍しいな」

引っ越しの手伝いに来ていたヤスが隣でそう言った。ヤスとは卒業した高校で知り合って、今も何かと私に世話を焼いてくれている。何度も籍変えをした私の高校生活の数少ない友人だ。

「誰から送られてきたんだろう」

あまり答えを期待していない疑問を真新しい部屋に放る。ヤスもとぼけたような表情で私の手の中にある三日月を見て首を傾げていた。

「嫌がらせかもよ?」

微妙な沈黙に耐えかねてヤスが切り出す。私もザラついた月面の手触りに耐えかねて少しお喋りになっていた。

「それはないでしょ。だって私、東京に始めて越してきたんだよ。友達もそんなにいなかったし、嫌がられてはいたけど、恨まれることはなかったと思うな」

「東京モンは怖いって言うっちゃね」

方言、出てる。そう言いたかったけど、もう何度目の指摘になるのか分からないからヤスの言葉の行先を黙って聞く。

「怪しい宗教とか、闇金融とか」

闇金融。その言葉は私に効く。アニメとか漫画の中から引っ張り出てきたようなその言葉の軽さが私は羨ましかった。ザラついた月面の手触りは更に不快になって私は床に月面をくつつけて、ヤスに見られないように隠しながら丁寧に置いた。

「人違いだよ。きつと」

私はあつけらかなとそう言ってヤスを説得し、春の三日月を桜のダンボールの中に入れ直す。

三日月を持ち上げる時、丁度黒くて見えないクレーターの部分が私の指に触れた。平らな砂の感覚がそこで終

わり、一瞬指が宙を舞ってまた元の月面に指が着地する。

ザラついた感触が少しはマシになると思って、私はクレーターの部分に指を置いて元の桜の寝床に三日月を寝かした。

ごめんね。急に起こしちゃって。

なんとなく心の中でそう言った。でも、言ったのは私ではなく母親だった。私はヤスに感づかれない程度に悲しい気持ちになってダンボールに差し込む明かりを落とした。月が入ったダンボールは玄關に置いたはずなのに部屋にはしばらく春の匂いが残っていた。

引越しを終えた次の日もダンボールは届いていた。中身を確認するとやっぱり花の匂いがして、春の月が昨日と同じように桜の花びらの上に収まっている。

「どうしようか。これ」

泊まり込みで作業をして、泥のように眠っているヤスに疑問を投げつける。しかし、ヤスは男らしい大きな鼻を立てているばかりでこちらの問いに寝返りで答えるだけだった。

恐らく、ヤスにこの状況が見つければいよいよ彼は東京の手荒い洗礼を信じ込み始めるだろう。もしくはストーカーを疑って、犯人が見つかるまでこの家に住むと言いだすかもしれない。それは地元で仕事を始める予定のヤスに申し訳ない。何より母親にこれ以上心配をかけたくなかった。

それで結局私はこの月を新居に置くことにした。この月と言ったのは昨日の月と今日届いた月が少し違うものだったからだ。といっても形状や大きさが変わったわけではない。

少しだけ影の部分が狭くなり、月の表面が前よりも露わになっているのだ。だから今日届いた月は三日月と呼べるものでは無かった。しかし半月ほどでもない。中途半端な月だ。きっとこういう月は他の月達よりも人に見向きされず、ただの時間経過として捉えられてしまうのだろう。

でも、名前がないと管理に困る。悩んだ挙句私は自分の名前をその月にそのままつけることにした。別に特別な名前じゃない。ありふれた名前だけれどこの月にはなぜかぴたりな気がした。

月に目を向けて何度か心の中で自分と月の名前を唱えた。もし、人違いであったときにマジックペンやらで名前を書いてしまっていたら取り返しがつかないからだ。かと言ってヤスが寝ている以上声に出すわけにもいかなかった。

心の中で数回唱えた後ダンボールの中の月の顔がこちらに向いたような気がした。昨日の三日月よりも少し広くて、見えるクレーターも増えた私の名前の月は残念がるわけでも、嬉しいがるわけでもなく、ただ黙って桜の花びらの上に乗っていた。

私の月は結局ヤスには見つからなかった。

それもそのはずでヤスは夜通しの作業に疲れ果てて昼間まで寝ていたのだ。そのおかげで月を隠す時間は十分にあった。私は色々思案した結果まだスペースのある下着入れの引き出しの奥に月と桜の花びらを押込んで、ダンボールに残った花の匂いを自分の服に吸わせることで打ち消した。起きて早々ヤスは「ダンボールの中に服突っ込むのは流石にまずいでしょ」と言ったが昨日嫌というほど鼻に入ったあの匂いには気付いていないようだった。

地元に戻ったヤスを駅まで見送って私は今日届いた月のことを考える。確かに月を土産や贈り物の品として買いつけるということが流行った時期はあった。流行期には引越し挨拶のために私も母もよく安い月を探して方々を駆け回った。けれど、必ず店頭で売っているのは満月である。考えてみればそれは当然で欠けている月は縁起が悪い。昔、望月が欠けていないのを見て自分の天下を歌った貴族がいたように満月の欠けていないことに験を担ぐのだろう。結婚なら夫婦円満、引越し挨拶や祝いなら引越し先での安泰祈願や近所との関係良好などだ。そう考えるとヤスがいた時は少しも感じていなかった恐怖を今更にして感じ、見えない誰かを欺くかのよ

うに突然立ち止まった。そして周囲をぐるりと見回す。

辺りは自分がつい一年前までいた場所よりも何倍も明るく人も多かった。当然だ。ここは東京のエキナカなのだから。交差点は終電に間に合おうとする人と早く家路に着こうとする人が入り混じってぶつかりそうぶつかりない波を立て合っている。その波の隙間で私は何度も見知らぬ人にぶつかつた。まだ私の身体は無自覚で人を避けられるほど東京に順応してはいなかったのだ。けれど、目に見えない誰かをまくにはうってつけだと思っ、私は半ばわざと不器用に駅街の道を通って行った。

駅を抜け、時間が経つと恐怖は大方抜けきって代わりにやってきたのは通り過ぎていった背広やスーツの人達のことだった。漠然としたイメージだけれど、この国のスーツを着ている人はたいがい仕事場で誰かと相対する時は笑っている。東京の都市部に来れば尚更そういう人は増えるだろう。つまり、日中は日本の人口の約半分以上の人がどこかで笑っているのだ。冷たい、夜のような笑みで。

しかし、他人事などでは断じてない。かくいう私も明日からはその笑顔の一部になる。家が近くなった頃私は頭の中で明日の会社初日にするべき行程を思い出した。

まず、先輩と同僚の顔をできるだけ覚える。自分の仕事を覚える。次にわからないことは必ず誰かに尋ねる。最後に頼れる人を見つける。

この行程は母親と共に作った私だけの上京マニュアルだった。

そして新居に到着し扉を開けると同時に「上手く笑う」という項目を頭の中で付け足した。

朝起きるとまず玄関前を確認するのが癖になっていた。私は半分の好奇心と半分の嫌悪感を胸に入れ込んで扉を開ける。すると、ドアに何かが当たる感触があって強引に覗けるぐらいに押し込むとやはり閉じたダンボールが傷ひとつなく静かに置いてあった。

「ねえ、今日もあったよ」

つい、口に出して報告してしまったが、肝心の報告相手であるヤスはもう地元に戻っている。アパートの小屋に寂しい独り言が吸い込まれていく。

当然、外に出したままにしておくわけにはいかない。ダンボールに向き直って玄関から出ると箱の両端を掴み上げて、中身の知れた引越祝いを床に置いた。箱は重すぎるわけでもなければ、軽いわけでもなく、床に置くとポスツと音を立ててそれきり何も言わなくなった。

さっさと開けてしまおうと思って私はカッターを見つけるために立ち上がった。その時ふと時計が目に入った。私は秒針を確かめるように二度見して、それから駆け出すようにに服を着替えて、部屋を飛び出した。

やはり、あの月は不幸の贈り物なのだろうか。私はすれ違つ不特定多数のスーツに縋り付きたい気持ちで駅街の交差点に立っていた。

交差点には落ちかけの日に背中を透かされた影達が揺らめく。そしてその影達は幾重にも車に轢かれていた。私の影も同じようなものだ。一度、信号の色が変われば今度は名前も知らない誰かとぶつかりながら向こう岸に渡って行かなければいけない。その過程で私の影も何度も踏まれていたのが目に入った。

都会人としての初日は最悪だった。朝はなんとか間に合わせたし、玄関口に取り立てての人がいないから学校にいた時ほど嫌悪な目も感じない。けれど、もっと根本的に周囲と私とは壁があるような気がした。言葉遣い一つをとってもそうである。同僚となる人達はみんな誰と打ち解け、誰と距離を取ればいいのかを心得ているように見えた。入社して早々にグループが形成され獣のような目をしてきた同僚達はあつという間にある一定のまとまりになっていくのである。

家の前に着いて玄関の扉を開ける前に私はマニュアルの達成度を確認した。先輩と同僚の顔は誰一人として覚えていなかった。自分の仕事はまだ決まっていなから保留できる。わからないことはありすぎて困るほどだ。どうやったらあんなに早く誰かと混ざり合えるのだろうか。今日一日、常にこの疑問が頭の中にあつたが勿論未達

成だった。同じ理由で頼れる人も見つからなかった。そして最後、私は家の中の窓に写っている私を見ながら尋ねた。

「上手く笑えた？」

「うーん、まだ全然」

窓の外の私がいまにも素直に答えるので私は少しだけ笑った。窓の外の私も笑った。けれど、上手く笑えてはいないように見えた。

とにかく散々で不透明な一日。窓から離れると私には既にダンボールを開ける気力もなく、ただ床に寝転ろんで夜が来るのを待っていた。

縮こまるようなタバコの匂いが懐かしさを含みながら鼻を通り過ぎる。私はガラス張りの夜空の部屋にいて、まるで神様みたいに都市を見下ろしていた。その都市は私の仕事場やそこに行くための駅とよく似ている。

こんなに人がいるのに閑散としていた。都市は静寂だった。誰もが静かに行方も知らずどこかに歩いていく。ある人は仄かに顔を赤くしてネオン街に消え、またある人は俯き加減でバスを待っている。まるで狩りを終えた獣のようだった。数えきれない大多数の彼らの疲弊感が自分を生かすためには当然だとも言う風だった。

私はまだ当然のようにその疲弊観を受け入れられていない。けれど、ある種当然なことだと思う。人間だって元を辿れば一匹の獣なのだ。それがなぜ獣同士で集まって社会などというものを作ってしまったのだろう。

彼らの名前もない足音が段々と耳元に忍び寄ってくる。無作為で、なんの法則性もない。しかし、彼らの足音は行進と言わざるをえないほど無感情でそれも目が見えない社会という生物の元に同価値だった。

足音は私の耳を叩いた。次に私の胸に響いた。脳が割れるばかりに足音が鳴り響く。それでも目は閉じれない。止むを得ず私は行進の源である都市を凝視し続けた。しかし、見れば見るほど行進は耳を裂き、心臓を破る。近づいているのではない。私は踏みつけられているのだ。どこから私によく似たそんな声が聞こえてくる。涙がひらひらと都市にこぼれ落ちた。

その涙が広がるうとした瞬間に都市は消え去り私は行進の痛みから解放された。眩しいほど部屋に青白い光が満ちて私すらも透かそうとする。見上げると巨大な球体がガラスの天井一杯に満ちて私を見下ろしていた。涙にぼやけた目を凝らすと緩やかにガラスの奥で揺れているその球体の正体は満月だった。妙なタバコの匂いが晴れる。変わって部屋には記憶に新しい桜の香りが芽生えた。

どこかから私を呼ぶ声がある。ぶっきらぼうでちゃんと私の名前を呼ぶ気もないようなその声にはなぜか安心していた。降り注ぐ青い月明かりが私の背後に何よりも自由な影を生む。その影から声が聞こえてくる気がする。しかし、それを確かめようと振り向いた瞬間にガラスの部屋は音も立てずに割れた。月輪が遠くなり、優しい声私が私と一緒に底果てもない深淵に落ちていく。

落ちていような浮いているような感覚の最中、月は徐々に影を生み、瞬く間に闇に覆われて私の潤んだ瞳の中でゆっくりと新月になった。

夢を見ていた。

凄く長かったよつな、けれどあつという間だった気もする。夢なんてそんなものだろう。

まだねむけている目蓋を開けて周囲を確認する前に身体が妙に重く、部屋全体が仄かに薄暗いことに気付いた。目を凝らして時計の短針を見ると七と八の空白に短針の細い身体が横たわっている。

おぼつかない足付きで明かりをつけてみると私は自分のあらゆる側面を覆い隠すのに最適な新品のスーツを着ていることに気付いた。スーツにはまだ新品らしい鼻をつくような匂いが残っている。

まるで、全くの赤の他人が来ているようだった。

耐えきれない。急いでスーツを脱ぎにかかると。不器用な私の身体は慣れない手つきで脱ぎ去ったため、かなりの時間がかかった。ようやく脱ぎ切ったスーツは投げ捨てるように宙に放った。

母に迷惑をかけまいと自分のバイト代を叩いて買った一張羅の黒服はカラスみたいに大きく袖を広げて羽ばたき、朝から置きっぱなしにしていたダンボール箱の上でぐうと言った。

そしてスーツの着地先を見てようやく私は部屋に未開封のダンボール箱があることを思い出した。朝は放り出してしまったカッターを使ってダンボールを開ける。

例の如く春が満ちる部屋。今度の月は半月だった。

弓形の弦の部分を線引きにして黒々と影がある。手に持ってみると砂っぽい感触があって、ダンボールの底から連れてきた桜の匂いがほんのりとした。

この形は丁度人の横顔に似ていると思う。肌のケアなんか全く気にしないポコポコなクレーターが所々にあって、この月がもし本当に人なら初対面で好印象を持つ人はほとんどいないだろう。だけど、なんとなく柔らかくて掴みどころがない。多分、そんな月。

人間がそういう風にモノを人に当てはめる時には必ずモデルになる人がいる。私で言えばこの月は丁度ヤスによく似た月だ。

私と出会った頃の彼は学校の指導部も匙を投げるほどの地域指折りの不良集団の中の一人だった。不良といつと少し語弊があるかもしれないけれど、厳しい顔つきに丸坊主の髪型で、どんな学生に聞いてもみんなあいつは不良と口を揃えて言うからヤスは学校の中で自動的にそのポジションに収まっていた。

ヤスの周囲の連中は会話こそしたことはないけれど、どう考えてもトラブルメーカーばかりだった。彼らはヤスに憧れていた。みんなヤスみたいないっぱしの不良になるために暴力沙汰とか窃盗を何度も起こしてそれを成し遂げるたびにヤスに報告していた。けれど、取り巻き達が目指す肝心のヤスは彼らの理想とするヤスとは本質的に少し違う人なのだ。

私の目には、ヤスはただ平等にこの世界の全てを嫌っているだけのように見えた。クラスメイトも、指導部の教師も、取り巻きの不良達も、そして多分、私のことも。

「じゃあ、お前のことも嫌いになるけど、それでいいん？」

ヤスに一度だけ私の印象を言ってみたことがある。その頃の私とヤスは下校時間を過ぎても教室に残って話し込んでしまうことが度々あって、ヤスは今よりも余程無愛想にそう言った。

「別に、いいよ。慣れてる」

「おもしろ」

ヤスは笑った。

「やっぱり、お前のことは嫌いだわ」

「なんでちゃ」

ヤスの方言を真似して聞いてみる。けれど、この使い方は間違いだったようで厳しいご指摘を受けた。

「大変なんだよ。平等でいることは神様にだってできんかったんやから」

開けた窓から不意に暮れかかったオレンジ色の風が流れてくる。柔らかいカーテンがそよいで日差しがほんの少しだけヤスの横顔にかかった。赤く濃んで、ポコポコになっている頬の上できつとした目線が誰もいない校庭のその先の紅色をぶちまけたような空を睨んでいた。

詳細に思い出せば、この半月はその時のヤスの横顔だ。後で知ったことだがその時ヤスは上京して就職しろと親に迫られていたのだという。例の如くヤスは親を嫌っていた。そして親の口から出た東京という場所も当然嫌いになったのだ。そう考えるとこの世界の全てを嫌いになるということはヤスの言う通りとても大変な作業なのだろう。

半月の名前はヤスにした。前の月のようにその人の名前にしなかった理由はヤスと呼ぶ方が親しみやすいからだ。それにきっとヤスは親と一緒にの名字なんて大嫌いだろうからこの名前は丁度いいのだ。

流石にヤスを元下着入れの場所に押し込むわけには行かず、その一つ上の使っていない引き出しに置くことにした。しかしいざ開いてみると引き出しは思った以上に広く、空虚な場所で、彼がひとりに慣れているとわかっ

ていても、この暗闇の中に放り出すことを私は躊躇した。

そこで私は下から私の名前のあの中途半端な月を取り出した。そしてヤスと私の名前の月を隣り合わせで転がらないように引き出しの底にゆっくりと置いた。引き出しの中で私の月は一番最初に届いた三日月のように怒るわけでも、悲しむわけでもなく、そっと私と目を合わせてくる。

けれどヤスの半月はずっとそっぽを向いた。その視線はなんとなく引き出しの壁を突き抜けて決して沈まない東京の夜を静かに睨んでいるような気がした。

真夜中がようやく寝付く頃に玄関の先で鈍い音がして、私はその音で目を覚ました。扉を開けると昨日の夜に降った雨のせいで空気が水を含み、目の前は濃い青で満たされて、薄暗く、まるで深海みたいだった。消えかけた夜の残りがあちこちに残って風一つない東京に無音を連れてくる。

チラリと横に目を落とすと昨日扉の前でつかえて苦労したダンボールが今日は玄関の側に置いてあった。床には粉々とした紙製の破片が所々に散らばっている。もしかすると私が起床したと同時にダンボールが動いて迷惑をかけるだろうと横にはけたのかもしれない。ぼんやりとした頭でそんな下らない妄想をするだけして残りは鼠色混じりの深いブルーをした朝方に放り出してしまった。

今日の月は私の月の双子だった。私に似てどこかそっけなく、自分と母親のこと以外はどうでもいいというような顔をしている。名前はそのまま双子月になった。私の双子月はヤスを挟んで両側に離れて置かれたけれど、やっぱり双子月は不平な顔すらせずに引き出しの壁を見ていた。

早朝に起きると私は大抵寝付けなくなる。それは母親といいた頃は早朝起きが夜逃げの合図だったからだ。夜逃げというのは名ばかりで大抵夜中は相手を逃すまいと借金取りが家の周辺をうろついている。なので、私と母は早朝の夜明け前に小さな車に乗って借金取りから逃れ僅かばかりの安心を得るのだ。そんな行為で借金取りを完壁にまけたことは一度もなかったけれど。

母親は夜逃げの車の中で眠れない私に色々な話をした。私の将来のこと、私が生まれた時のこと、私の恋愛のこと、いつも母親の話題は私を中心だった。けれど、一度だけ私以外の話をしたことがある。その時私は初めて生まれてきたことや自分が出産拒否をしてきたことに罪悪感を感じた。母親が一番最初に身籠っていたのは双子だったのだ。ところがその双子が産めるかどうかわからないというタイミングで出産が認証され、あるうことが流産してしまったのだという。私はその後の三回目にも生まれたのだ。

確かに流産は医師のミスだし、出産の是非も生まれる前の胎児が選択できる権利ではあると思う。けれど私はその双子と同じ胎盤で育ち生まれたのだ。今でも今日みたいにふとしたタイミングで私の代わりに生まれるはずだったあの子を思い出すことがある。高校に入るまで私はこの事実を全く知らなかった。母親が辛い分なんでも頑張ろうとあれほど勉強していたのに自分の過去なんて何も知らなかったのだ。

だから、この双子月は私の双子でもあるし私ではない生まれるはずだった二人でもある。きっと私は生まれる前に運を使いすぎたのだ。どうして都合の悪い時に限って神様は私に平等なのだろう。

私とヤス、それから双子の誰か。三人が同居する小さな部屋に桜の床を敷いてみる。その頃には朝が来ていて窓から差し込む日差しが引き出しに影を作って三人の月の顔は見えなくなった。丁度その時、私が上京した時に買った型落ちのガラケーが寝室から私を呼んだ。母親からだったのに声の主は親戚の叔父だった。切迫した吐息を電話越しに漏らして叔父は聞いたことのない絞り出したような声を私に届けた。

私は不幸にも全てを理解した。慌てふためく叔父を落ち着かせてすぐに母の元へ向かうと告げた。そうだ、会社に電話しなきゃ。そう思って携帯の画面をもう一度見直した瞬間に画面に雫が落ちて初めて自分の頬が濡れていることに気付いた。

母親は病室の窓際のベッドにいた。緊急の入院だったせいかわりに驚くほど何もなく、机には名前のわからない明るい色の花が数本生けてあった。その明るい花々に支えられるようにして窓の奥のつつすらと見える山際

から大きな入道雲が季節外れに湧き立っている。

母親は私に来てもしばらくは黙り込んで山から伸びる遠い雲の行方を見つめていた。窓に映る母親の目はまるでシヨウウィンドウの中の憧れを見る子供のようで、私はそんな目をする母親を初めて見た。病院を忙しく行き来する足音と東京よりも圧倒的に少ない車の音が入り混じり母と私の間に小さな沈黙を作る。

「仕事、大丈夫？」

先に沈黙を破ったのは母親だった。やっぱり私のことだった。

「お母さんこそ」

そこまで行って言葉に詰まる。母親は静かにこちらを向いて頷く。恐ろしいほど静かな表情だった。母親の背後の花が僅かに揺れて、雲の横を入道雲が通り過ぎていく。母親はその短い動作だけを済ますとまた窓に顔を向けて追いつがる入道雲から青空の方へと逃げていく飛行機の行先を見えなくなるまで眺めていた。

病室から出た私には泣く準備ができていた。なるべく人目につかない場所を探そうと誰もが行き先のある病院を彷徨った。けれど、泣くことを許してくれるスペースなんてどこにもなくて、ついに雫はまぶたの縁からゆっくりと溢れ出してきた。その感触に気付いて私は逃げるように病院を後にした。

都会よりも変わるのが遅い信号機が赤になるのを待つ。さっき病室で見た山際の入道雲は雨脚を早めて私の頭上まで迫ってきている。その雲に母親の表情が浮かんで不意に母親が作ってくれた上京マニュアルを思い出した。先輩と同僚の顔をできるだけ覚える。今日一日は零点だ。それも名前すら書けない無回答の零点。

自分の仕事を覚える。これも同じ。無回答の零点。

次にわからないことは必ず誰かに尋ねる。これも零点。

上手く笑う。空を見て涙がこぼれないようにしながら無理に笑おうとする。けれどやっぱり頬は濡れる。つまり零点だ。

最後に頼れる人を見つける。そう、頼れる人。私が頼っていたのは結局母親だったのだ。自分一人でなんとかしようと思いつながらピンチになると救ってくれる神様のような人と母親に対してどこかで思っていた。人間が神様の真実を自分の頭で作ってしまうように。

「大変なんだよ。平等でいることは神様にだってできなかったんやから」

ヤスはどうなのだろうか。そう考えた時涙は一時的に止まった。無骨で、ポコポコで膿みだらけのぶっきらぼうな横顔と半月が頭に浮かんだ。携帯を取り出し、うる覚えの記憶を辿ってヤスの携帯番号を打つ。

ありがちな語呂合わせで覚えた電話番号は私をその人の場所へ導いてくれた。ヤスの息が聞こえて、彼がどうしたのと言う前に叫ぶような声で「助けて」と言った。

ヤスとは高校時代に私が行きつけだったカフェで話すつもりだったがヤスは来るなり「山のほうに行こう」と言い出して私の返事も聞かず、スタスタと仄暗い雲のある方へと歩き出してしまった。なので私の魂胆は完全に破れ、私は一度も行ったことのない完全アウトエーの敵地へとついていくことになった。

東京とは比にもならない小さな街を出て田んぼの畦道を行くヤスの背中を追う。不意に立ち止まったヤスの目の前には黒いバイクが山の黒雲を睨み付けるかのように止まっていてヤスはそれに飛び乗ると私に「乗れ」と無言の合図を送った。

空はもう今にも泣き出しそうで、田んぼの草木が揺れて冷たい風を連れてくる。行く先々が通学路と丁度同じで、バイクに乗ればこんなに早く歩ける道だったのかと少しだけ感心した。あその曲がり角はヤスと一緒に隠れて買い食いたコロッケを食べたところ、あっちは野良猫がよくヤスから餌をもらってたところ、それでこのアスファルトと田んぼの間の道は特に思い出はないけれどなんとなく好きだった場所。全部が全部バイクに乗るとあつという間で水気を含み出した風と徐々に緑を帯びてきた道をヤスは切り裂きながら走っていく。

山には小さな神社が一つあった。そこにはすぐく小さな満月がお供えされていて境内はその月を残して苔に覆われていた。

「言い忘れてたことがあってん」

「こちらのことなどまるで忘れてるように着くなりヤスは言った。

「神様はここにいらっしゃる」

森に小さな滴が垂れてくる。私はその感触を髪の毛で受け止めて遠い昔の夢から冷たく覚めたような気がした。

「だからせ」

雨がごとと草木を割いて。

「オレと少しだけ付き合ってくれん？」

ヤスは照れ臭そうに横を向いた。その瞬間に雨は私達の元に降り注いで私の涙を少しだけごまかした。きっと月はここからやってきていたのだ。心の中で根拠のないそんな思いを呟きながら久しぶりに笑顔で「嫌いなくせに？」と言った。

それから私とヤスは二年くらい付き合った。けれど母が亡くなったと同時に別れた。もちろん偶然だ。元々と遠距離の付き合いということもあったしヤスの本質である人間嫌いを私は受け止めきれなかった。ただ、それだけ。

ヤスはその後に地元で別の女性と付き合い、結婚した。その報せが来る頃には私はすっかり東京に着せられて、交差点で誰かとぶつかることもなくなっていた。

東京からヤスとお嫁さんが同居する予定の新居へ届ける贈り物を一人部屋の中で考える。悩みに悩んで時間も忘れて考えていると、ふとあの月達が頭に浮かんだ。私は引き出しの中から月を取り出すと腐りかけて部屋中に散らばってしまった桜の花弁をかき集めてダンボールの中へ入れた。

今になってみれば申し訳ないほど粗末で、不吉な引越祝いだと思う。そんな月入りのダンボールを輸送会社の人に渡して一気に空っぽになったような部屋に私は呆然と佇んだ。

いつの間にか夜明けが近くなっていた窓に目を泳がせた。空は星屑をふうふうと拭いた朝を帯びて徐々に明るくなっている。

母の大好きだった青い空よりも少し濃ゆい紺碧の朝方に私とよく似た有明の月がまだうつすらと残っていた。